



巻頭に寄せて

会長代行 西原美津子



巻頭にあたり、機関誌第2号発行後における当会の主な国際的な活動について、二つほどご報告したい。一つは、米国品質学会 (ASQ) 監査部会 (QAD) の日本支部としての活動であり、他の一つは、前号でご紹介した IATCA (国際級審査員・研修機関認定協会) における当会の関与についてである。

数年来、当会は ASQ/QAD の日本支部としての奉仕活動を展開してきているが、昨年 10 月に、この QAD の定例役員会議に出席した三浦会長が International Councilor (北米外の統括者) として指名され、以来、QAD の日本支部は、すなわち米国・カナダを除く世界中の統括者という立場になった。今年 2 月にも、QAD の年次大会に出席しているが、これらについては、会長が出席者の立場から本誌に詳細を報告されているので、ご参照頂ければ幸いである。

次いで、IATCA について述べると、昨年度の英国での年次国際大会で議題に挙げられた QMS コンサルタントの国際認定スキームの策定に向けた検討グループが発足し、IRCA(UK)の代表らとともに、当会から三浦会長と小林理事の 2 名が協議員として加わることになった。今年の 8 月に南アフリカのダーバンで予定されている IATCA の年次大会では、コンサルタントの国際資格の認定基準の素案作りの報告が出されるであろう。

昨今、QA の世界では、ISO 規格に基づく品質体制の効果的な運用が盛んに論じられ、監査の質に始まり、ISO 国際規格そのものについても声高な批判が飛び交う時代にあって、QMS の構築に際してはコンサルタントの果たす役割が甚だ大きいことを思えば、その国際資格の認定は時宜を得たものと言えよう。当会としては、そうした ISO を取り巻く様々な混乱の解決に風穴を明ける一助となるべく、微力ながらもこの認定基準の策定に積極的に働きかけていきたい考えである。



目次

巻頭に寄せて	1
指導・推進者の特質とは何か	2
ISO9001/ISO14001 複合審査を受けて	3
第 7 回 ASQ-QAD 大会に参加して	4
情報リテラシー	6
適合性監査見たまま・聞いたまま	7
事務局から	8
編集後記	

国際品質保証協会は、QA に関連する活動を通して、広く社会の繁栄に奉仕・貢献することを目的とした任意団体で、最近ではマネジメントシステム全体を対象に活動している。その一環として ISO 9000/14000 他各種規格に対する適合性監査、QA 及び監査員養成講習会並びに認証取得・PL・安全対策等、依頼先の期待と要求に合わせたコンサルティングなども行っている。

指導・推進者の特質とは何か

会員 野村隆夫

はじめに

駕籠に乗る人、担ぐ人、そのまた草鞋を作る人。この言葉には役割分担以外に人間関係の機微が読み取れる。マネジメント・システム(MS)の世界も同様、監査する人、される人、それを指導・推進する人がおり、その役割を遂行するための専門的知識や技能以外に人間性に根ざした特質が必要となる。

アレクシス・カレル(フランス人;ノーベル医学賞受賞)は、「科学のような人間の外にあることは日進月歩と呼ばれる目覚ましい発展をしているが、人間そのものについては余りわかっていない。」と言う。

監査する人の個人的な特質や資質については ISO 規格に示され(品質: ISO10011-2 の7項、環境: ISO 14012 の7項)、また、講習会でもそう指導している。次に、監査される側は不特定多数であり、MS 構築に望ましい特質や資質は求めにくい、敢えて列挙すれば、「素直である」、「本質を掴む」、「熱意がある」等がある。更に、審査前には各事業所なりに何らかの心得を作成して、職制を通じて徹底しているのが実状であろう。

ところが、三番目の指導・推進者の特質については余り論じられていないようで、記述したのも見当たらないので、私案を述べさせて頂く。

指導推進者の技能

伊藤仁斉の書に「理を明らかにし、わかり易く説明し、わかり易く書いているものは正しく、理が難しく、わかり難い説明やわかり難い書は邪説である。」というのがある。わかり難い説明や書物は直ちに邪説と言わないまでも、少なくとも相手を惑わせ、間違わせるものとなる。企業内の講習会では、日常、第一線で精力的に活躍している人を講師に招くと成功する場合が多い。知識・経験が豊富で、また、気概と迫りに満ちており受講者が畏敬の念を抱く。最近とみに話題になっている脳からα波が発している状態は、発想や物事の吸収に優れた状態のようである。この状態になる方法はいくつかあるようだが、基本的には心身のリ

ラックスにある。相手をリラックスさせながら聞かせる達人がいる。「あの講師の話はわかり易く、リラックスでき、その結果講義に集中でき、結果もよい。」と多数の受講生から言われている講師がいる。こういう事例を帰納的に考えていくと、いくつかの指導技能が挙がってくる。1)わかり易い。2)専門知識・経験で信頼を得る。3)肩の力を抜かせる、等々。指導・推進者が自己啓発すべき課題であろう。

相対的特質と絶対的特質

OJT の講習で「職場で10人集めて話すと、しっかり聞いて理解している人は2~3人、少し聞いている人は4~5人、残りは殆ど聞いていないものである」と聞いたことがある。これから類推すると何事でも指導する時は、最低4度は説明しないと理解して貰えず、一度説明したぐらいでわかっていないと怒ってはならないのである。人体に異物が入ると体はそれを排除しようとする。(臓器移植も同様である。)人が構築した組織でも全く同様の現象が起こる。QMS や EMS のような新しいものを組織に導入する場合も同じである。デーブル・カーネギーは「人は論理の動物ではなく、感情の動物である。」と言う。

指導・推進者は怖れず進まねばならない。「怒るな」、「怖れるな」、「悲しむな」の三勿をしっかりと潜在意識に植え付けておく必要がある。一方、人間には科学も自分も発展・向上させたいという基本的な願望があるとされている。指導する人と指導される人は究極では共鳴する同一人と成り得る。その究極に至らしめるのが絶対的特質ではなかろうか。それは人間性に根ざしたものである。「明るさ」、「包容力」、「思いやり」、「尊厳」、「厳しさ」、「謙虚さ」、「誠実さ」、「人間愛」、「調和」など。これらが指導特質とどうつながるかはこれから考察しなければならないが、いずれにせよ、指導・推進者は人間性を高める必要がある。

おわりに

現在、世界はあらゆる分野でグローバル化が進みつつある。国際規格 ISO の QMS や EMS という分野も正にその波に乗っており、それに携わる機会を与えられたのである。よりよい貢献をするために、専門知識・技能の向上を図ると同時に、指導・推進者の特質向上も図るべきと考える。個々人の問題として片付けることなく、是非、議論の場を作り、諸先輩のご意見を拝聴させて頂くことを願っている。

ISO9001/ISO14001 複合審査を受けて

大日本インキ化学工業(株)東京工場

会員 渡部長幸

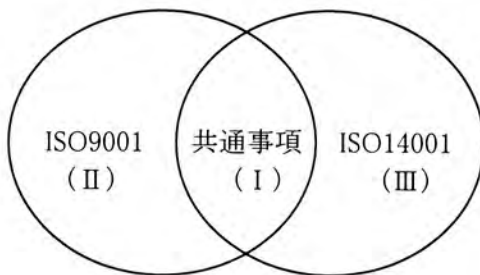
複合審査までの経緯

大日本インキ化学工業(株)東京工場では、ISO9001の認証は1994年3月に取得して体制の維持もそれなりに定着してきたが、審査機関からISO9001とISO14001を複合で同時に審査してくれるという情報が入ったので早速それに乗って準備活動に入り、1997年12月に受審してISO14001の認証も取得した。

複合審査に臨んで

ISO9001とISO14001とはいずれもマネジメントシステムを基礎としており、ISO14001の序文にも、「効果的なものとするためには、体系化されたマネジメントシステムの中で実施し、かつ全経営活動を統合したものにする必要がある」と記されている。付属書の「ISO14001とISO9001とのつながり」では、両システムの統合の可能性に言及している。

これらの関係は、図示すると次のようになる。



複合審査では当然、審査プログラムの組立てが重要になるが、この図のI、II、IIIに切り分けられ、概ね次のような分類で実施された。

(I) 共通事項

1. 体制及び責任(組織)
2. マネジメントシステム文書
3. 文書及び記録の管理
4. 運用管理

5. 不適合並びに是正及び予防処置
6. 内部体制監査
7. マネジメント・レビュー
8. その他

(II) ISO9001 のみの対象事項

1. 検査・試験の状態
2. 製品の識別及びトレーサビリティ
3. 統計的手法

(III) ISO14001 に特有の事項

1. 環境側面
2. 法的及びその他の要求事項
3. コミュニケーション
4. 緊急事態への準備及び対応

複合審査のメリット

1. ISO9001とISO14001とを同時期に審査することで、審査期間の縮小、受審回数の減少が出来る。
2. 審査に関わる手続き(審査機関と企業側との手続き)等が効率化する。
3. 審査のスケジュール管理として、共通部分の簡素化が可能である。
4. 企業側としてシステムを融合することで効率化に結びつく。マネジメントシステムとしての効果的運用のベースが作られる。
5. 将来、新しい規格が出来てきて、取り入れる場合、マネジメントシステムの付加要件として構築することが容易となる。

複合審査を終わって

複合審査を取り入れるには、ISO9001かISO14001いずれかの認証を得て、システムが確実に維持されていることが重要であることを実感した。我々は、ISO9001の認証を得て、既に6回の定期審査を経験していたことが、ISO14001のシステムを付加する自信となって、認証登録となったと言える。システムが安定しないうちに、複合審査を導入することは、受審側のシステム維持への意識が薄らぐことが懸念される。受審側の従業員全員がシステムについて習慣化していることが大切であると共に、特に内部監査を充実させ、場合によっては、外部審査機関による審査がなくとも管理体制が堅固であると言える状態にあることが望ましい。

第7回 ASQ-QAD 大会に参加して

会長 三浦昭夫

はじめに

アメリカ品質学会(ASQ)の監査部会(QAD)では、毎年2月に大会を行っており、今年も2月下旬にケンタッキー州レイヴルの Galt House というホテルで開催された。1991年のQADの設立時に委員(Charter Member)兼日本代表となり、その後、1995年夏に International Deputy Councilor(副代表)に指名されいながら一度も行けなかったのだが、昨年10月のQADの役員会で International Councilor(北米外世界全域代表)に任命され、立場上、無理を押して今回の年次大会の出席となった。

準備委員会

昨年の10月にQADの役員会を兼ねた大会の準備委員会に出席。初日は約20人の役員全員で全会場及び会議室の視察、2日目は大会の次第の詳細の討議、3日目は役員会という日程だった。役員は、会長が米国 BASF 勤務の Wendy Finnerty 女史、副会長は Norma Frank 氏、Janet Muschlitz 女史、大会の実行委員長は Dennis Arter 氏、他は JP Russell, Terry Regel 他、ASQ の出版図書や雑誌記事の著述でQAと監査では世界的に有名な人達がキラ星のように名を連ねていた。席上で彼らの忙しい仕事の合間を縫っての献身的な奉仕活動のありさまを直接目にして、ただただ感服の一語であった。私共も日本では ISO-MS 研究会という奉仕活動を6年以上実施しているが、スケールの大きさでは大変な違いがある。改めてアメリカの伝統と底力かと感じた次第。

役員会

役員会は、全役員の活動状況の報告と今後のQADの運営方法についての討議で、概要はASQの会報"VISTA"に掲載され全世界に配付される。役員は会長と副会長の下に、総務、経理、広報、出版、…と業務ごとにいる他に、地域担当で北米を15分割し、それ以外の世界全域が、"International"となっている。日本は以前は西海岸の州の属州の位置付けであっ



たが、数年前に私から頼んで独立させてもらった。私は数人の役員とはファクスで交信していたが、全員と初対面。この中でただ一人、ミシガン地区代表の Bill Harrelとは私と連合で仕事する仲間になっていた。彼は QS-9000 でアメリカ屈指の専門家だが1日に煙草5箱以上というヘビースモーカー。彼と2人で中座して喫煙場所で一服していたら、JP Russell氏が来て「やっぱりここにいたな。出番だから戻ってくれ」とのこと。中座の間に私を International Councilor に任命するという決議で、いきなり就任の挨拶をさせられた。1990年にCQAとなり、その後 Senior Member、QADの委員、次いで、日本では当協会としてASQの支部活動を続けていること、1996年からのCQAの試験を日本で開催し試験官を務めている他、新聞等で広報活動もしていること、さらに、毎年招待されているIATCAの国際会議にも、最初は英国のIQA/IRCAの一員として出ていたが、最近ではASQの日本支部代表という立場も加えさせて貰っていること、これらの立場から今後はIATCAとRAB関係でできるだけ頑張っていきたいとして締めくくった。RABはASQに属する機関なので、QADの役員は全員が、当然関係が深い。それでも私のRAB会長との8年に亘る友人関係は今後のQAD、RAB/IATCAの発展のための潤滑油として行きたいということも付け加えた。

昼食会の際に Finnerty 会長のお呼びで出ていたら、「2-3日前に誕生日だったろう」ということで私にケーキの授与があり、みなに拍手された。初対面なのにここまでというアメリカ人のおおらかさと気配りもさることながら、即刻調べ上げる手際のよさには驚いた。

役員会の合間に

前述の JP Russell と Terry Regel の両氏は、1996年出版以来私が絶賛して推薦している“After the Quality Audit”という本の著者であり、また、最近QADで1997年春に編集した“Quality Audit Handbook”の編者でもある。Dennis ArterはCQA受験者のためのASQ推薦図書に挙がっている“Quality Audits for

Improved Performance”の著者である JP Russell に、“Quality Audit Handbook”について私からの修正コメントを 10 点ばかり出したら、とても喜んでくれ、次版で修正する際に採り入れることになった。これと引き換えに、当協会の目玉である上級監査員講習のテキストの英語版を見せたら、目を皿のようにして読んで絶賛してくれた。これは同時に別のコピーを世界屈指のコンサルタントである N.C Kist 先生にもお目にかけてののだが、同様のコメントを頂き安心した次第。また、Dennis Arter からは、彼の本の日本語訳を引き受けることになった。これを日本の監査の世界に紹介すると大変利点があるので、適当な出版社が見つければ翻訳にかかりたいと考えている。



年次大会

年次大会は、2月24-27日に開催された。最初の2日間は Preconference Tutorial で ASQ/AIAG 推薦の QS-9000 の講習会、26-27日が本大会、翌28日は役員会であった。私は QS-9000 講習会に参加し、気楽に聴講させて貰った。講師は日本にも来たことがある Rand E. Winters で、講義は明快だった。

本大会前日の、25日夕方は、Dennis Arter 実行委員長主催の役員の夕食会。ここでは、一部の役員に対して記念品として Louisville の名産物である大リーグ向けの野球バットの贈呈式があった。Dennis Arter は自称 Audit Guy というペンネームで、私に対しては “Baseball Guy” という呼称で特別にバットを用意してくれ、会場の片隅で1~2回素振りさせられ、皆にはやし立てられた。このユーモアと余裕。

本大会は、参加者がアメリカ全土から600人、欧州から南米から十数名、アジアからは私1人。朝、昼、晩と大会場に集まり、午前・午後は3会場に別れての発表会。他に、30人までのグループが、JP Russell 及び Regel による Galt House Hotel に対する模擬監査

に同行見学という催しがあった。大会の主題は、“Bring It Together”、グループごとのテーマは、

1. Reaffirming Core Concepts(人扱い中心)
2. Making Audit Work(監査の効率化主体)
3. Pharmaceutical, Medical, and Healthcare Applications(GMP及び安全・衛生関連主体)

それぞれのテーマで各12人位の講師が45分づつ講演した。話題は当然監査関連が主体だが、内容は多種多彩。全部の配付資料を1冊に製本したものを配付されたので、これからゆっくり目を通すところである。私が参加したテーマで面白かったのは、Norman Frank の監査のための抜取り方式に関する考察、これは、MIL, Bayesian, Dodge-Romig, …から、エイヤツ式も含めてのあらゆる方式を表にし、それぞれの長所短所を分析比較したもので、実に面白かった。DeWitt Beeler の内部監査によくある出鱈目、Bill Harrel のリスクマネジメントがらみの話、Terry Regel の外注先監査のユニークな発想などが傑作であった。いずれも趣向をこらしてジョークをふんだんに交えて話すのも見事であった。後で何人かの講師と歓談したが、波長がよく合い、話が尽きなかった。紙面の都合で話の概要すら書けないのは残念だが、とても楽しい催しだったとだけ報告させて頂く。

26日の夕刻、RABからの説明会があり、RABの審査員認定制度、QS9000審査機関の認定、IATCAとの関係、今後の動向等について一般向けの紹介があった。これには Finnerty 会長他一部の役員と共に出席。すぐその後での QAD 役員の夕食会で状況を皆に報告した後、私が IATCA の Verifying Auditor になっていることと毎年会議に出ているという立場から審査員の認定基準の改善の必要性について演説をさせて貰った。審査員及び諸種機関の質と倫理の改善については、RAB/IATCA と QAD が同じ認識に立ち、いかに協力していくかであり、論議の焦点となった。QAD と RAB とは今まで同じ ASQ 内部の組織でありながら、互いに忙しくて横の連携も中々取れなかったのだが、最近 QAD の Cyndy Miller 女史を QAD との連絡役として RAB に送り込み、連携体制を固めたところである。なお、RAB を 8 年前に当協会と私とで日本に紹介して JAB 設立の基盤を作り、その後、日本人での RAB 登録審査員を多く生み出した経緯があることをここで付言させていただく。

(8 頁に続く)

情報リテラシー

ISO World 辻井浩一

ISO-MS 研究会会員

世界につながる自宅のパソコン

インターネット(注)の普及でパソコンのような情報端末を操れる者は、居ながらにして世界中の誰とでも自由に情報交換できるようになってきた。自宅でも会社でも、筆者のパソコンの電源を入れれば、1分後には世界中を渡り歩ける状態にある。

ASQ や EARA の最新情報はすぐに取り出せるし、JAB に登録された認証取得企業の検索も容易にできる。聞きたいことがあれば、ISO インフォメーションセンターにでも国内関係者と何ら変わらぬ手軽さで通信ができる。

こういう世界に入ると、国境とか地理的隔たりを全く感じさせない。日本規格協会に電話する方が余程距離感がある。アメリカの面白いデータを簡単に見ることができる一方で、カナダの審査員研修機関の連絡先を知らないか、などと自国のことを平気で尋ねてくる人もいたりする。「日本にいる日本人の小生がそんなことを知るわけがない」と思うのは、島国にいる日本人の考え方と言えるかも知れない。

昨年末頃の日経夕刊によると、Native English Speakers はたった 3.72 億人の世界第 2 位で、50 年後にはヒンドゥー語にも負けて第 3 位に転落するらしいが、この世界のデファクトスタンダードは完全に英語だ(中にはスペイン語で電子メールを送ってくる勇ましい者もいるが)。インターネットの世界には英語の下手な人がワンサというから、日本人もメキシコ人も香港人も、この世界では母国語なまりの英語は気にしなくてもよいのである。

情報発信基地は高感度受信アンテナ

2 年ほど前から ISO World というホームページを開いて、国内外に ISO9000/ISO14000 関連情報の発信を始めた。いろいろ工夫したこともあって、このところ ISO World ヒット数は毎月 1 万件を超え、アイル



ランドの Brian Rothery 氏から outstanding website と いわれるほどになった。この世界で仕事をしながら ISO World を知らない人は「もぐり」と言ってもよいほどである。

現在のところ手弁当のボランティアによる運営であるが、これがどうして中々面白く、発展的な仕事をするのに大いに役立っている。というのは有力な情報発信基地は、同時に効果的に情報が集まる基地でもあるからだ。貴重な情報を惜しみなく無償で提供することによって、世界中からあれこれ反応がくる。国内はほとんど問合わせばかりだが、それでも質問の中に生々しい情報が忍び込んでいることもある。海外からの電子メールは give and take で教えられることが多い。また、この世界での主要各国のキーマンとも知り合いになれた。上述の Brian Rothery 氏とはすっかり意気投合し、ネットを通じ協業しつつある。香港政府筋や同業界に顔が利く蔡劍勳氏も同様だ。

世界各国に話ができる相手がいることは、大いに心強く、便利である。なによりホントに知りたいことがすぐ聞けるのはありがたい。その日のうちに電子メールを出しておく、翌朝には返事が読めるから面白い。お天道様と一緒に情報が回っている感じだ。扱う規格だけがグローバルで、アプローチ(仕事の進め方)はローカル、というのはいただけない。そういうのを、"glocal"というのだそうだ。英語・パソコン・インターネットは、現代ビジネスのグローバルな情報リテラシーなのである。

ISO World:

<http://www.omninet.co.jp/isoworld/db700378@jnet.sei.co.jp>

注: 世界中の無数のローカルネットを蜘蛛の巣の様に結び、情報がそこを渡り歩くことからインターネットと言う。

適合性監査見たまま・聞いたまま

◆ ISO9000' 条文の誤解と翻訳 ◆

会員 石原 隆昌

審査の現場から

最近、審査機関の一員として審査する機会が増えたが、数年前の私達と同じように、受審される企業の方が、ISO の要求事項の解釈について悩み・誤解されて、結果として無駄又は的外れな品質体制を構築して運営されているのをよく見受ける。JIS Z9900's が発刊され、ISO の原文である英語で解釈する必要性が薄れたのも一つの原因ではないかと思う。これらの悩みと誤解の例を挙げてみた。

- マネジメントレビュー: 経営者による見直し
 - ・ 経営者が「品質マニュアルの改訂」を指示すること?
 - ・ 経営者が「管理責任者」の作った記録に印を押すこと?
- 品質計画書
 - ・ 現行のものとは違った又は別の「大変なもの」を作らなければならない?
- 契約内容の確認
 - ・ 契約だから営業の仕事が主?
 - ・ 仕様が固まった後に契約書を取交わす場合は?
- インターフェイス: 何のこと?
- 妥当性の確認
 - ・ 何のこと? 何かしなければ? 取りあえず……としておこう。
- 工程管理
 - ・ 工程の進捗管理/日程管理のこと?
 - ・ 製造以外には使わない?
- 計画
 - ・ 監査計画書、教育計画書は、年間日程計画?
- 教育・訓練
 - ・ 教育にそんなにお金をかけられない?!
- 明確にする??
- 確実にする??

原文と JIS の規定

適合審査の基になる規格は JIS の日本語訳だけで解釈している企業が多いようで、むしろ「JIS 訳であらねばならぬ」と考えている節がある。また、審査機関に

よっては、審査員が JIS 訳を推奨又は強要することもあるとの話も聞いたことがある。しかしながら、JIS Z 9900's は、そのまえがきで「---ISO 9000's を翻訳し、技術的内容及び規格票の様式を変更することなく作成した---」と述べてあるように単なる翻訳である。あくまでも ISO 9000's は英語の原文が正なのである。

複数の少し分厚い英和辞典を引いて、また、トレーニング、プロセス、レビューなどの日本語化した英語と照らし合わせて見ることによって、これらの悩みを解消し、誤解を解く糸口になった。その上で、ISO 8402 の用語の定義を読み、ISO 9000's の条文を読むと、「何だこんなことだったのか」と思えて来た記憶がある。もちろん、自分の仕事と審査等の対象となる仕事の中身をわかるように、できるだけ頭を柔らかくして考えるよう心がけたつもりである。

翻訳について

他国語を翻訳する場合、無責任に辞書の訳語例をつなぎ合えばよいというものではなく、意味を完全に捉えて最も適切な自国語の表現で、真の意味を正しく伝える必要がある。そのためには自国語と翻訳対象に精通していることが第一条件だと思う。従って、「原文から直接自社に適した意味を日本語に表す」のが最も正確な翻訳ということになる。そうはいつても、原文に立ち返る余裕がなく、日本語の本当の意味を素早く知りたいと思う場合は、良い訳を探す必要がある。ISO 規格について言うと、前号で紹介された「図解 ISO 早わかり」のような会社管理実務と英語を徹底的に理解している人の手による翻訳を参照するのを勧めたい。

自社で使う用語

言葉には、同意語/同音多義語というものも多く、翻訳でも日本語が原語である場合でも、画一的である必要はなく、自社で使用している用語が間違っていなければ無理に変える必要はない。例えば、「注文書」と「発注書」、「検討」と「吟味」等々、その場その場で、意味に相違なく正確で適切な日本語ならば、自社の慣用語を堂々と使うことは全く問題ないし、むしろそれが自然なことであろう。このことはまた、ISO 規格の序文にもあるように、自社の用語を、他に強制しないということにもなる。発注元、コンサルタント、審査機関、審査員等の自制と節度が要求されることにもなるのではないかと。

最終日の役員会

早速来年の年次大会の準備の打合せとなった。来年は、Houston の Westin Oaks Hotel で2月、その準備委員会は今年10月に同じホテルで行う。実行委員長は今回は Linda Reinhart 女史。各役員は今から手配を開始する。また、5月始めには Philadelphia で ASQ 全体の第52回年次大会(AQC、Annual Quality Congress)があり、ここでも QAD の役員会を開催する。この AQC には私は8年前に出ているが、世界中から3千人以上が集まり、QA 及び監査の他に、統計的管理、信頼性、本物の TQM のテーマも加わって壮観だから、日本の関係の方々にも広く参加をお勧めしたい。

おわりに

大会の参加者のうち、CQA 資格者には名札の下に特別の標識を付けてくれた。女性もかなりの数がいるが、CQA になっている人達は見識も優れていて話しをしても歯ごたえが違った。CQA になっていると、米国では、ASME, FDA-GMP, QS-9000 等の監査の世界で一目おかれることもまざまざと実感できた。CQA の試験はマークシート式だが、正しい監査経験がないとできない問題が多く、本物とそうでない者との見分けが相当明確に出る試験である。私も古株の CQA ということで恥をかかないで済んだ。世界各国で急ごしらえの ISO 審査員の質が問われている今日、ISO 審査員の条件に追加すべきという意見も出ている。なお、CQA 及び CQE の数では日本が世界でも一番少ない国であることも世界中に伝わっている。これを挽回するためにも当協会がこれからは頑張らねばならない。



事務局の私が在住している白井町(千葉県)が、1月30日に ISO 9001 の認証を取得した。全国の自治体としては初で、嬉しい限りである。この取得により、地域住民や事業所への啓発が進み、町ぐるみの環境保全活動のモデルとして進むことを期待したい。町内事業所等の環境マネジメントシステムへの取組みに向けての相談・助言にも応じるようである。

1998年3月26日に、ISO9001の第2回の定期監査を受け、本審査と前回の定期監査に続いて今回も指摘事項・観察事項共になし。(斎藤栄二)

編集後記

最近、グローバルスタンダードという言葉が流行している。「日本人が問題にしている意味でのグローバルスタンダードを、あるデータベースで探してみたが、見当たらなかった。これに類する言葉の一つはデファクトスタンダードであろう。」という意味の記事が3月初旬の日経新聞の「春秋」というコラムにあった。当方も同感である。ISO9000's も世界のデファクトスタンダードの一つであることを案外意識されていないのではないかと。使う側からみれば、国にとらわれることなく、役に立ち便利であれば普及してグローバルになるわけである。

今回図らずもこれに関する記事が集まった。日本に米国品質学会の支部があっても不思議ではないし、ISO の条文を英語で正しく理解することも JIS に反することでもない。品質/環境の複合審査も企業側の要望を察知して審査機関が自ら対応したものであろうし、指導・推進者の特質にしても「議論の場」から何か生まれるかもしれない。そしてグローバルという語感に対して一番わかりやすい、ISO World の「情報リテラシー」の記事である。(石原隆昌)

本部：〒745 徳山市弥生町2丁目1番地
西原技術事務所 気付
Tel：0834-21-0177 Fax：0834-21-0716
事務局：Fax：0474-92-0449 又は Fax：045-891-4535

東京支部：〒153 東京都目黒区下目黒3-24-14-703
(有)国際品質システム 三浦昭夫 気付
Tel：03-3712-6776 Fax：03-3712-3399
機関誌発行回数/頒価：年2回/年間1000円